

黙殺された女たちの物語：ジョイス・キャロル・オーツの『ブラックウォーター』と『ブロンド』

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2023-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森井, 美保 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/2000006

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



黙殺された女たちの物語

——ジョイス・キャロル・オーツの 『ブラックウォーター』と『ブロンド』——

森 井 美 保

1. はじめに

ジョイス・キャロル・オーツ (Joyce Carol Oates, 1938-) の『ブラックウォーター』 (*Black Water*) (1992) は、1969年7月に起こったチャパキディック事件の被害者を描いた小説である。チャパキディック事件とは、エドワード・ケネディ上院議員が運転する車が湖に転落し、同乗していたメアリー・ジョー・コペクニが水中の車の中に取り残され死亡した事件である。一方、『ブロンドーマリリン・モンローの生涯』 (2003) (*Blonde: A Novel*, 2000) は、アメリカの女優マリリン・モンローを描いた小説である。

チャパキディック事件についての執筆物は数多く存在する。そこに書かれているのは、ケネディの人柄、事件の経緯、事件後のケネディの行動、裁判の様子、作者自身が組み立てた事件の真相などであるが、被害者のコペクニについては、経歴などが簡単に説明されるだけで彼女の本質にはほぼ触れられていない。更に、マリリン・モンローの伝記も数多く出版されているが、モンローが本当は何をを考えて生きていたかなどの彼女の内面は描かれていない。

『ブラックウォーター』が出版された10年後の2002年に、オーツはラジオのインタビューでチャパキディック事件の被害者について “She [Mary Jo Kopechne] was trapped in the car. She was trapped in such a way that there was an air pocket. . . . Ultimately, she probably suffocated . . . but she was able to live for hours before the water actually suffocated her. . . . But all headlines and all the stories were about Ted Kennedy.” (Koval) と語っている。特に最後の一文 “But all headlines and all the stories were about Ted Kennedy.” から、チャパキディック事件がケネディの事件としてしか語られず、被害者が置き去りにされているという状況にオーツが不満を感じていたことが読み取れる。そこで、オーツが『ブラックウォーター』で行ったことは、ケネディ

の陰に隠れて注目されない女性被害者の物語を語ることなのである。

『ブロンド』でオーツが行っていることも『ブラックウォーター』と同じことだと言える。オーツはLawrence Grobelのインタビューの中で“Do you feel you've given her [Monroe] back her humanity?”という問いに対して“That's what I hope, her inner poetic self that has been lost. The spiritual self that we all have” (212). と答えている。オーツが『ブロンド』で行っていることはまさにこれ—モンローの内面の私的な部分を回復すること—なのである。この論文では、当然のように行われているチャパキディック事件を語る上での被害者軽視とマリリン・モンローを語る上での内面軽視を、オーツが作品の中にどのように反映させ、そこにどのような思いを込めているのかを追究していく。

2. 『ブラックウォーター』：チャパキディック事件で軽視された被害者の存在

チャパキディック事件についての報道や出版物の中では、被害者の女性については詳しく語られていないというのが実情である。オーツはその裏に潜む女性軽視を『ブラックウォーター』の主人公ケリー・ケラハーを描くことによって批判している。ここでは、フェミニズム理論を使用して『ブラックウォーター』が示唆しているチャパキディック事件の中の女性軽視の深層を追究する。

シモーヌ・ド・ボーヴォワールの『第二の性』(1949)は「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」(12)という一文で有名であるが、この文をもっと直接的な表現にすれば「人は女に生まれるのではない、社会によって女にされるのだ」と言うべきだろう。そのことをボーヴォワールは次のように説明する。

…「女らしい」女の基本的特徴と見なされる受動性は、ごく幼い頃から、女のなかで培われる特徴なのだ。…実際にはそれは教育にあたる者たちや社会から押しつけられる運命なのだ。…男の子は企て、発明し、決行する。…することによって、もっぱら行動のみをとおして、男の子は自分を存在させるのである。

反対に、女にあっては、はじめから、自律的存在と「他者としての存在」のあいだに衝突がある。女は気に入ってもらうためには気に入られ

るようにしなくてはならない、自分を客体にしなくてはならないと教えられる。だから、自分の自律性をあきらめねばならない。生きた人形として扱われ、自由を禁じられる。このようにして一つの悪循環が作りあげられる。(33-4)

「女」は「生きた人形」として扱われるとあるが、チャパキディック事件の中のコペクニは、一見、気の毒な被害者という確固たる地位を与えられているように見えるが、事実上、ほとんど語られず、事件の本質からは除外された「客体化され自律性を持たない自由を禁じられた人形」なのである。ケネディ（男）が主体であり、コペクニ（女）はその主体の存在を証明、強調するための客体としてしか存在価値がないのである。

この、女性は主体である男性の存在を強調するための客体という考え方は、『ブラックウォーター』のケリーと上院議員、父親、元恋人のG—との関係の中にしっかりと組み込まれている。ケリーがこの三人の男性と一緒にいるときに呪文のように現れる「おまえは大事なかわいい娘」という言葉がこの関係性を象徴していると考えられる。以下は、上院議員の乱暴な運転に不安を感じているケリーが、夫婦喧嘩をした後の父親の運転を思い出す場面である。

ケリーは不安な気持ちで思い出した。これは父の運転に似ている。母との謎めいた喧嘩のあと、父がする運転に。ケリーの記憶のなかのその喧嘩は、おし黙った無言の喧嘩だけに、ますます謎めいてきて、ますます不安になった。

〈よけいなことを訊くんじゃない。ちゃんと坐ってなさい。そう、それでいい。おまえは大事なかわいい娘なんだから、いいね?〉(23)

更に、一人で海岸にいたケリーの所に上院議員が現れた場面でもこの言葉が出てくる。

重ねられた唇の感触。その日の午後早く、ケリーはほかの人たちから離れて、ピクニック・テーブルの上に頬づえをつき、眠気と太陽のまぶしさにぼうっとしていた。ちょっと気分も悪かった。…そのとき、誰かがそっと近づいてくる気配がして、ケリーはまつげの間からはだし

の足を見た。…彼女のむきだしの肩に何かが触れて、ちらちら揺れた。電気ショックのような衝撃が走り、肌に触れたのが彼〔上院議員〕の舌だと気がついた。むきだしの肌に触れた生温かい柔らかい舌。…

長い時間が過ぎたような気がした。二人はひとことも交わさなかったが、それでもケリーは、ほほえもうとするように唇をゆがめた。…
(おまえは大事なかわいい娘なんだよ、そうとも！) (79-80)

また、ケリーが上院議員と初めて握手した時に思い出した元恋人のGーとのセックスの場面でも出てくる。

彼〔上院議員〕はにこやかに彼女の手を握った。自分では意識せずに、握られたほうにははっきりそれとわかるほどきつく手を握りしめた。…ある男たちは、相手の目の中に、瞳の収縮に、握られた痛さに驚く表情を見ようと、そんな握り方をする。

Gーも、セックスをしながら彼女を傷つけることがあった。…
…。〈きみは大事なかわいい娘なんだよ、わかるね？〉

彼の体重がのしかかり、彼の両腕が彼女にまわされ…。彼女を排除したままの、身勝手な征服。(61-2)

この「おまえは大事なかわいい娘」という言葉は、男性たちがケリーを自律性のない「生きた人形」と見なしている証である。この言葉は、客体である女は何も考える必要はない、主体である男の言うとおりにしていればよいという、男性の支配欲と女性蔑視を露わにしている。つまり、オーツはチャパキディック事件が描かれる際にコペクニのことがほぼ語られない（重要視されない）という女性被害者を馬鹿にしているような状況を、三人の男性たちのこのケリーを子ども扱い（馬鹿に）するような言葉で再現しているのである。

オーツがこの小説で行っていることは、単にコペクニをケリーに代えて、彼女を主体としてチャパキディック事件を語り直すことだけではない。主体である男性の支配欲を満足させる客体としてのケリーを描くことによって、被害者の女性を軽視して（踏み台にして）ケネディ追及に邁進する男性中心主義的な事件の語り方にも問題を投げかけているのである。

3. 『ブロンド』：人々が聴こうとしなかったモンローの心の声

『ブロンド』は基本的にモンローの人生を既にすべて知っている全知のナレーターが物語を語り、モンローの心の声や人々の証言などが直接話法で挿入される形式になっている。オーツのモンロー観はナレーターが語る以下の言葉に集約されていると見ることができる。「彼女の問題点は、彼女がばかなブロンド娘ではないということだった。彼女はブロンドでもなかったし、ばかでもなかった」(398) オーツは、自分が考えるこのモンローの本質——世間から見られているようなセックス狂のバカで軽い女ではない——を示すために『ブロンド』においてモンロー自身の心の声を作り出しているのである。

オーツが作り出したモンローの心の声には鋭い自己分析や苦悩が含まれている。例えば、彼女は男性社会の中でどうやって生き延びていったらよいかということをしかりと心得ている。以下は、最初の夫バッキー・グレイザーとの結婚生活から得た教訓である。

プライドから、しかも男のプライドから、グレイザー一族の女たちは「家庭」の外に働きに出なかった。ノーマ・ジーン [モンローの本名] は無邪気にこう尋ねた。「でも、今は戦時中でしょう。時と場合によるんじゃないかしら？」…

おれの妻はだめだ。絶対に。

男の欲望の対象であるからこそ、おまえはここにいられるんだ。その目はそう言っていた。ペニスを勃起させろ。そうすれば価値がなくても必要とはされる。…

私の人生において基盤となった真実があるの。それが真実であれ茶化したものであれ、ともかく、男に求められている限り、この身は安全だ、ということよ。(267) (下線、筆者)

妻を外に働きに出したくないグレイザーは妻を夫の所有物と考える典型的な父権社会の中の男であると言える。彼と離婚しハリウッドの映画界に入った後も、モンローは男性中心主義社会で生き延びるために、男たちに消費され続けることを選ぶのである。モンローの心の声は、その選択が男性社会の中で生き延びるための彼女の戦略であるということ物語っている。

リュース・イリガライは女性に課せられた社会的役割について述べている

が、それはモンローが社会から要求された役割でもあると言える。

母、処女、売春婦、これらが女に課せられた社会的役割である。そこから、女性的（といわれる）セクシュアリティの諸特質が生じる。すなわち、再生産と養育と価値のつりあげ。貞節。羞恥。無知。さらに快樂への無関心。男の《活動》の受動的承諾。消費者の欲望をそそるための誘惑。しかし、自らは快樂することなく消費者の欲望の物質的支えとして身を奉げる。…母であっても、処女であっても、売春婦であっても、女には自己の快樂への権利がない。(243)

『ブロンド』のモンローはこのような抑圧された女性の社会的役割をすべて心得ていて、それを受け入れながらもその役割を逆手に取っているのである。このモンローは非常に強かでたくましい。オーツは下線部のようなモンローの心の声を自分の小説に挿入することによって、モンローが実際には、男性中心社会が押し付けた男性好みの頭の弱いセックス・シンボル、男にだらしなない映画スターという固定化されたイメージ通りの単なるバカなブロンド娘ではなかったことを暗示しているのである。

セックス好きのだらしなない女というモンローのイメージは、実際に彼女が数多くの男性と性的関係をもっていたという事実から引き出されている。しかし、オーツはモンローの数多くの男性遍歴を描きながら、男性たちの偏見や支配的態度に対するモンローの心の声を挿入することによって、彼女が男性のどのような要求にも喜んで応じる単なるセックス好きのだらしなない女ではなく、プライドや意志をもった一人の人間であることを強調している。

モンローと親しくしていたチャールズ・チャップリン・ジュニア（キャス）とエドワード・G・ロビンソン・ジュニアが、モンローを「お魚ちゃん」と呼ぶことに対しての彼女の心の声はその例と言える。

（そういえば、オットー・エーゼ [カメラマン] も電話で彼女や、他のモデルたちのことを「お魚」と呼んだことがあった。しかしノーマ・ジーンがキャスにその意味を訊いたとき、キャスは肩をすくめて部屋から出て行ってしまった。エディ・Gに訊くと、彼は無愛想に答えた…「お魚？なぜって、きみは『お魚』だからさ、ノーマ。やむをえないんだ」「で

も、どうして? 『お魚』ってどういう意味なの?」ノーマ・ジーンは笑いながらさらに突っ込んで訊いた。エディ・Gも笑いながら嬉しそうにこう言った。「『お魚』ってのは、女を指す言葉。魚はべとべとした鱗があって、臭いだろう。しかもぬるぬるしている。わかるだろう? …とりわけ、臓物を抜かれて横になっている姿のことを言うんだ。わかったかい? …」]

しかしノーマ・ジーンの武器は女であることだった。…

だってわたしたちがいなければ男は子どもを持ってないんだから。男だけじゃ、息子なんて持てないのよ。

女がいなければ、この世界は終わってしまうの。女がいなければね。
(580-1) (下線, 筆者)

モンローは生前最後のインタビューで “Please don’t make me a joke.” (McCann 219) と言っている。これは、彼女が世間から軽く見られていることを意識していた証であると考えられる。下線部のモンローの心の声は、女性を蔑む「お魚」というジョークを発するようなすべての男たちに対する彼女の抵抗の意思表示であると捉えることができる。

ミシェル・フーコーは、権力の策略によって、主体の性がその主体の真実を説明しているという認識がもたらされたと述べている。

我々は性に真理を語ることを求める … 主体における因果律, 主体の無意識, それを知っている他者における主体の真理, 彼 [主体] 自身が知らないことについての彼のなかにおける知, これらすべてが, 性についての言説のなかに自らを繰り展げる手段を見出だしたのである。しかしながらそれは, 性そのものの帰属する何らかの自然的特性というものによるのではなく, この言説に本来的に内在する権力の策略によってなのだ。(91-2)

人々はモンローの「女」という性に彼女の真実を語ることを要求し, 更に彼女の「女」という性そのものが彼女の真実を語っていると決めてつけているように見える。しかし, モンローの性=モンローというイメージを作り出したのは彼女自身でも彼女の体でもない。そのイメージを作り出したのは,

彼女を商品にしたハリウッドの映画界であり、彼女を商品として消費した観客なのである。彼らが伝説にした彼女の性の真実は、嘘とは言わないまでも、それだけがことさら強調されて肥大化し、勝手に彼女に押し付けられたものであるとすることができる。オーツは、『ブロンド』のモンローの心の声で、彼女の性が彼女の人間性そのものを語っているのではないことを示しているのである。

4. 結論

オーツは、『ブラックウォーター』において、ケリーの物語を語ることによって、チャパキディック事件についての報道や出版物の中で被害者が語りの主体には決してなれないという状況を打破したと言える。『ブロンド』においても、マリリン・モンローに声を与えることによって、彼女をセックス・シンボルという記号ではなく一人の生身の女性として描くことに成功している。

これらの作品によって、オーツは、存在を黙殺された女性たちの立場から物語を語り直し、男性中心主義のメディアや社会を痛烈に批判しているのである。『ブラックウォーター』と『ブロンド』は女たちの存在証明の書なのだ。

引用文献

- イリガライ, リュース『ひとつではない女の性』棚沢直子, 小野ゆり子, 中嶋公子訳, 勁草書房, 1987.
- オーツ, ジョイス・キャロル『ブラックウォーター』中野恵津子訳, 講談社, 1992.
- 『ブロンド—マリリン・モンローの生涯(上)』古屋美登里訳, 講談社, 2003.
- フーコー, ミシェル『性の歴史I 知への意志』渡辺守章訳, 新潮社, 1986.
- ボーヴォワール, シモヌ・ド『決定版 第二の性II 体験(上)』『第二の性』を原文で読み直す会訳, 東京, 2000.
- Grobel, Lawrence. “Joyce Carol Oates on Marilyn Monroe.” Greg Johnson. ed. *Joyce Carol Oates: Conversations, 1970-2006*. Ontario Review Press, 2006. 203-212.
- Koval, Ramona. “Books and Writing.” Interview with Joyce Carol Oates. *Radio National* 20. October. 2002.
- McCann, Graham. *Marilyn Monroe*. Rutgers UP, 1988.